

## 江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0306 NO104

校長 伊波喜一

突風に 校庭の松 ゆらゆらと 大暴れする 春の嵐か

昨日は久方ぶりに大風が吹き、傘が何度もめくられて困った。一昨日が初夏を思わせる陽気だっただけに、その落差に驚く。春の到来と共に、風は南から北へと吹き始める。この自然のリズムの正確さには、いつも感心させられる。今日6日は啓蟄(けいちつ)である。陽の光に温められた地中から、虫たちも這い出でる陽気を表す。一日ごとに、春に近づいていくようだ。11日は東日本大震災より7年目の節を刻む。7年前のあの日、校庭はゆるやかに揺れた。いつもなら止むはずの揺れが、ゆらりゆらりと地の奥が滑り、しばし揺り止まなかった。東日本には死者・行方不明とともに甚大な被害がもたらされ、その復旧は今も道半ばにある。電車が不定期運行で帰れないため、泊まり込んで仕事をした。屋内にもかかわらず底冷えがひどく、温かい食べ物がこれほど胃の腑を満たすものだとは思わなかった。自宅に戻ったのは5日後のことである。帰り道、辺り一面茶褐色の畑の畦道に、オオイヌノフグリが小群生していた。青紫の小粒な花々が、疲れた心に沁みわたっていくようだった。